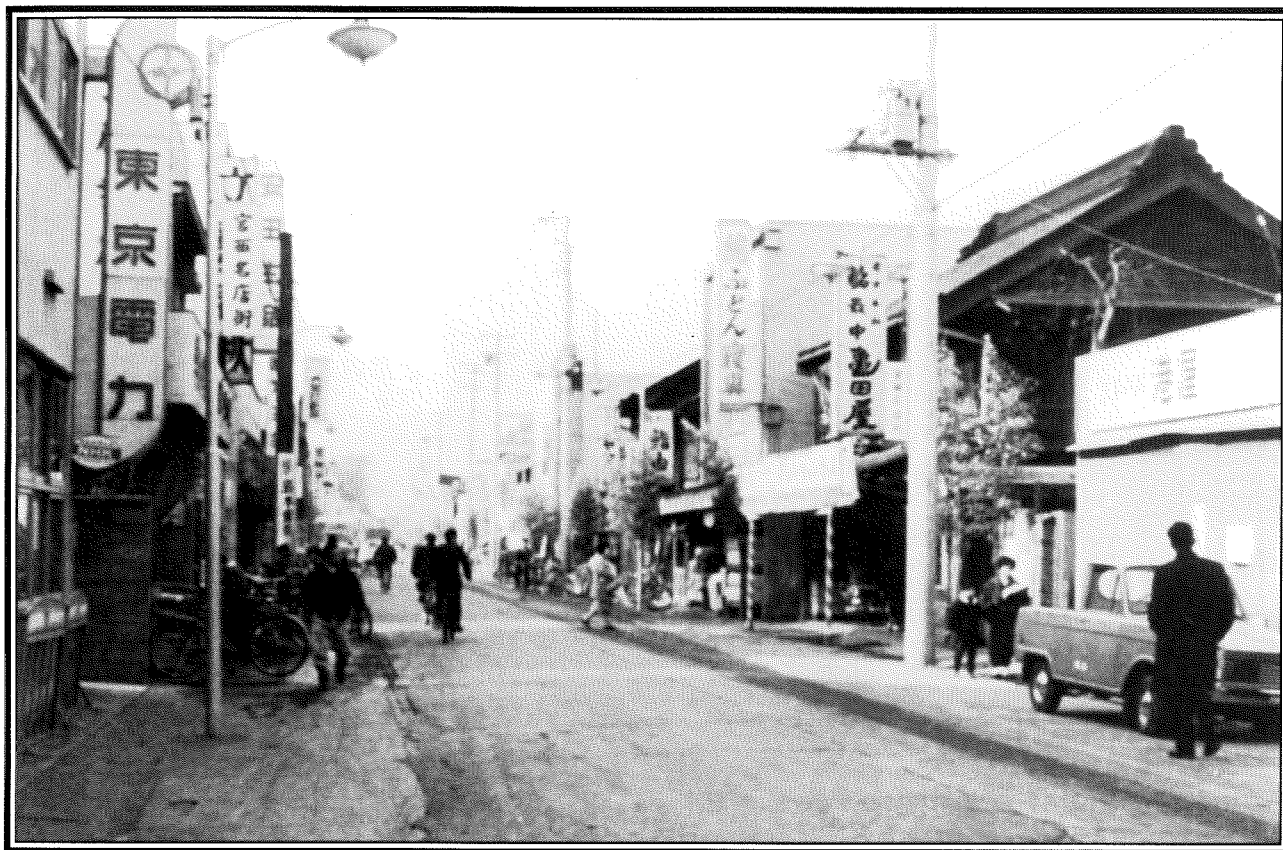


# あるむぜお74

府中市郷土の森博物館だより

a | museo NO. 74

2005年12月20日



旧甲州街道の店々に立つ竹飾り 昭和38年(1963)1月撮影(写真No.356-08a)

## 目次

### 1-2 宮本常一の見た府中 その3

#### 門松の立たない町

### 3 展示会案内

#### 岩合光昭写真展 IWAGO WORLD

### 4-5 ノート 冬鳥・旅路の果て…空と海の間に

### 6 シリーズ体験学習の砦

#### 星空は一期一会～星空観望会～

### 7 最近の発掘調査 番外編

#### 武蔵府中熊野神社古墳 国指定史跡決定！

### 8 たまRIVER WARS ⑪暴かれたシナリオ

正月と盆くらいは武蔵野の町や村をあるいてみるとよいと思いつながら、正月はほとんど外に出ず、盆の頃には東京以外の地の調査旅行に出ていることが多くて、そういう時期の武蔵野のことはほとんど知らない。ただ大晦日にはできるだけ大国魂神社へまいるようにしている。府中の町は大国魂の氏子で、正月には門松をたてないで笹竹だけたてる。これは大国魂の神が松を嫌っていた為だといわれている。同じ府中の中でも四ツ谷のあたりは松をたてた。しかしその松かざりも門にはたてず、家の正面にかざり、丈の低いものであり、松を四本たてたものもあり、かざりの下をくぐることはできなかったという。

宮本常一『私の日本地図 武蔵野・青梅』

(1971年 同友館より)

最近、宮本常一については、「民俗学者」よりも「多くの写真を残した人物」という評価をされることが多いように思います。実際、彼の写真のなかには冠婚葬祭、年中行事といったいかにも民俗学者が撮影しそうなものよりも、何気ない日常の風景や道路、電車に乗っていて流れる車窓、はじめて訪れた土地を気づいたポイントごとに撮影したものなどのほうが多くあります。さまざまな風景を技術やアングルにあまりこだわらず、記憶のメモがわりとしていたようです。今回はそんななかからあえて、ほかに民俗学者がその場にカメラを持っていたらならばおそらく撮影するだろうと思えるような写真を選んでみました。

今回とりあげた2枚の写真は常一が正月に出かけた府中を撮影した写真です。昭和38年(1963)と思われるこのときは、<sup>あの大國魂神社</sup>や周辺の旧甲州街道やケヤキ並木などで8枚ほど撮影しています。

昭和38年の彼の日記には1月1日(火)「3時ごろアサ子と大國魂神社へまいりかえってねる。」と書かれています。さらに5日には「府中へ親子3人でゆく。銀行へ108000円あづける。図書館へ行って大西氏と話す」とあり、二度ほど大國魂神社周辺を訪れています。ここに残る写真を見ると、境内に市も出ておらず、晴れ着を着た人や参拝客、商店街の人通りも少ないし、撮影途中に元旦には営業していなかったであろう銀行の窓口が撮影されていることから、5日の写真なのでしょう(ちなみに「アサ子」とは奥さんのことで、昭和37年より、山口県の<sup>すあつおおしま</sup>周防大島から上京し、府中でいっしょに暮らすようになりました)。

写真には市内在住の人なら一度は聞いたことがある風習、門松ならぬ竹飾りが大國魂神社を中心とした旧甲州街道沿いに家ごとに立っているのがわかります。「ここには門松を立ててはいけない」という禁忌習俗の伝承の実際が納められた写真といえるでしょう。正月に門竹を立てるという習慣は、現在もあります。ハシの日に皆が当たり前に行っていることをあえてやらない、という場所は日本各地にあり、たとえば正月にモチをつかないところ、端午の節句に鯉幟を掲げてはいけないところ、祭神の紋と切り口が似ているので祇園祭の最中キュウリを食べてはいけないといった食物

禁忌なども実は各地に見られます。そして各地で「なぜそれを行ってはいけないのか」ということに関してさまざまな由来が残されているのです。府中の竹飾りについては次のようなことが伝えられています。

府中には、門松を立てない。竹だけです。昔大國魂さんが八幡さまと、どこかへ鎮座しようと府中へ目をつけてやってこられた。八幡さまは、大國魂さんを待たせたままいい場所を探してしまった。大國魂さんをすっぱかして鎮座したのです。それが今の八幡神社なんです。大國魂さんは待つのはつらい、いやというのでそれ以来松がお嫌いだ

と語り伝えられたのですね。それで門松も立たないといわれているんですよ。

これは渡辺紀彦・矢島源太郎「府中の正月むかしむかし」として昭和44年(1969)、『東京都府中市立郷土館報 郷土館だより』No.1に掲載されたものですがそのほかにも伝説や絵本などさまざまな形で伝えられています。府中の正月行事として特徴的な竹飾りですが、宮本の写真に登場するのは、ここに紹介した昭和38年以外2回のみで門竹以外の正月飾りや民家の神棚の写真などほとんどありません。府中の正月行事について調べ上げようとすると、神社祭礼や個々の家での行事、さまざまな風景をさらに撮影し、体系化しているところなのかもしれませんが、これは府中で暮らす宮本が正月の一風景



小松屋呉服店に飾られた竹飾り  
(写真No. 229-09 b)

として何気なく撮影した結果偶然残ったものです。

ところで表紙で紹介した写真、はたして門松のない正月の風景が納められているだけでしょうか？ここには、現在では失われてしまった多くのものが残されているともいえます。たとえば旧甲州街道、舗装されていますがセンターラインが引かれていません。また歩道と車道の間に仕切りがありません。町のたたずまいを写したとも言えます。現在のようにたくさんの車が走っているわけでもなく、かつての看板や自動車、街灯など、「宮西名店街」と銘打った場所のちょっとむかしが残っているのです。

写真からは宮本の撮影当時の視点、興味関心をさぐることができます。しかし残された写真を今後活かしていくには、彼が「何を写したのか」ということに加え、写真に「何が写っているのか」を、個々の視点で改めて読み解いていくことが必要なのだと思います。

## 岩合光昭写真展

会期：2006.1.29 ~ 3.12

# IWAGO WORLD

どうも最近、不思議な現象がニュースで流れたりします。人家に出没するタヌキ、交通事故に遭遇したキツネ、田んぼから凶暴な大ガメ捕獲、一般家庭の台所に巨大なニシキヘビ、関東の川でアザラシが長期滞在、そして東京湾にクジラが迷い……河口域には何とホオジロガメ出現！

本来いるべき場所から逸脱した野生動物……地球環境的な原因も全く無いわけではないのですが、どうやら我々人間の行為が大きく関与したためだと考える方が正解のような気がします。アザラシやジョーズは例外としても、人間の手で持ち込んだ海外からの野生動物、人間が開発した森や林から逃げ出して餌を求めて彷徨う野生



©岩合光昭

動物、きっとカメラに収めたら、その背景は合成に見えてしまうほどに違和感たっぷりなのではないでしょうか。野生動物たちの後ろには広大な原野や、天を突く山の頂や、谷や川や海があってしかるべきはずなのに……

都市に生きる野生動物……それはそれで今の時代を考え、過去を反省するには絶好の材料になります。また、従来の自然に「都市」という新次元の生態系が加わったと捉えれば背景のビルや車にもそのうち慣れてしまうでしょう。しかしながら、原点を忘れるわけにはいかないのです。雄大でこそ自然、限りなく深い空間こそ自然、そしてその大自然を活性化させているのは紛れも無く植物も含めた野生生物です。

1枚の写真に収まる、我々の忘れてしまいがちな原点の構図……岩合光昭さんが35年間に及ぶ写真家生活の中でストックしてきた大自然のありのままの姿、それはアフリカのサバンナであり、極北の冷たい海であり、緑深い山奥であり、そして時には「都市」に遊ぶイヌ・ネコの無邪気な表情であり……



©岩合光昭

もはや岩合写真には、単に自然写真・野生動物写真だけでは括れない何かが同時プリントされているような気がします。人間の潜在意識の中に語りかける遠い昔に見たモノ、感じたモノ……いや、そもそも我々人間を含めた全ての生物にとって、誕生時からDNAに組み込まれている野生の因子を呼び起こすためのメッセージを発信し続けているのかも知れません。

恒例の「梅まつり」とともに新春を飾る、世界的自然写真家の作品群から、あなたはどれだけの「想い」を受け止めることができますか？

(中村武史)



©岩合光昭

## 冬鳥・旅路の果て…空と海の間に



今年も渡り鳥がやってくるゾ！  
マガモ（山溪カラー名鑑『日本の野鳥』より）

## 動物分類上の位置

動物界は、単一の細胞で生活する原始的な種から二足歩行で道具を使う私達ヒトまで、実に千差万別です。下等動物から高等動物に至るまで、一種類ごとにそれぞれ特徴を持ちますが、細部は異れど基本的に大枠は似たもの同士という風にまとめられています。こうして分類されたいくつかのグループを見比べ、さらに似通っているもの同士のまとめると、かなり大きな群の分類単位ができあがります。その大きな括りのひとつに、体が左右対称で中心に背骨があるという共通項でまとめられているグループがあり、脊椎動物門と呼ばれています。もちろん管状の中樞神経があるとか、動脈と静脈が毛細血管で繋がる閉鎖血管系であるとか、赤血球中にヘモグロビンが含まれるとか、肝臓や胃腸があるとか、他にも項目はありますが、「脊椎を持った動物群」の一言で理解してもらえははずです。門は大きな単位なので、含まれる動物も多岐に亘るのは当然のこと、我々を含む哺乳類をはじめ、両生類・爬虫類・魚類・鳥類などがこのブロックには属し、例えばサルもカエルもカメもサンマもスズメも同じ仲間だということを示しています。見た目に違って形態的特徴から同門に属すと言われれば納得せざるを得ませんが、果たして視点の違う共通因子は他に無いのでしょうか……そこでこんな話題……魚類と鳥類に見られる近似種ゆえの似通った行動とは？……キーワードは「旅」です。

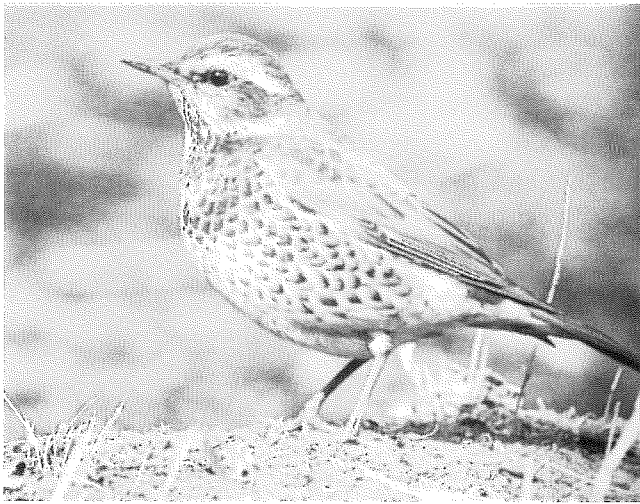
## 回遊と渡り

魚と鳥、どこから見ても同じ家族とは考えにくい姿

をしています。ましてや棲んでいる場所さえも空と陸に対して水の中という全くの別世界。それでも分類学上の同じ位置なら、形態以外で似ている所を探してみましよう……それは両者共にフーテンの寅さんよろしく旅の常習者であるという点です。旅といえば私達人間の娯楽でもありますが、「可愛い子には旅をさせろ」で示されるように試練の例えとしても使われています。旅に出ればひと回りもふた回りも成長し戻って来るという理屈からですが、実はこれ、魚や鳥が旅をする目的のひとつなのです。

魚には一生涯、または一年を通じて、潮の流れに乗りながら群れを作って大移動する種類がいます。この旅を「回遊」と呼び、季節的な回遊や繁殖のための回遊、餌を求めての回遊など、それぞれで目的は違います。誰もがよく知っている魚の旅は、川で生まれたサケが一旦北太平洋を旅して成長後に帰って来るという話でしょう。逆にウナギなどは日本の遙か南で産卵し、生まれた稚魚が川に戻って大きくなるパターンです。水の抵抗をあまり受けない紡錘形のタイプに多く、かつ水を切る鰭の存在がこの習性に適しているわけですが、そうではないスタイルの種類はほとんど出掛けません。

鳥はどうでしょう？ 周辺地域、または郷土の森博物館のフィールド内でも注意深く見ていると、一年中いる鳥の他に春と夏の季節別で観察される種類の存在に気が付きます。つまりはどこからかやって来る旅の者が入り込んでいるのです。これこそが、春から夏にかけて南の国からやって来た「夏鳥」、そして秋から冬にかけて北の国から訪れた「冬鳥」なのです。鳥には他の脊椎動物が持ち合わせていない翼という機能があり、大空を自由に飛ぶことが可能です。旅をするか



渡り鳥は山や林にも…  
ツグミ（山溪カラー名鑑『日本の野鳥』より）

ら翼があるのか、翼があるから旅をするのかは鶏と卵論争になりますが、かなりの長距離を移動することができるわけです。これを称して「渡り」と言い、働き場所や住み場所を転々と変える苦勞人・落ち着かない者の意味をこめて彼らを「渡り鳥」と呼ぶのです。日本に生息する野生鳥類の4分の3に相当する約4000種が、太平洋・北米大陸・中国・ロシア・東南アジア諸国などを渡っている者たちなのです。

ツバメなどの「夏鳥」は温暖な場所で卵を産み育てをする目的、ツグミやマガモなどの「冬鳥」は極寒を回避してひと冬を過ごすためにわざわざ日本を訪れます。シギやチドリの仲間は、シベリアから東南アジアに向かう際の休憩処として日本に立ち寄りという、まさに「旅鳥」。もちろん魚同様、全ての鳥が長距離移動をすることはありません。ウグイスやホオジロなどは山地と平地を行ったり来たり国内移動のみで、「漂鳥」と呼ばれますが、近距離ゆえに「渡り」には属さず、カラスやスズメに代表される、ひとつの地域から動かない「留鳥」同様、旅行者には当てはまりません。

### 冬鳥はふたたび

陸地は海で分断されますが、海と空は全てがひとつながりの道となります。魚の通り道は海と川、生活場所こそ陸地であるものの、鳥の移動ルートは空。両者共に、ある意味必然的な「旅」の行動を起こす理由がこんな所にも存在するのかも知れません。この季節、いたる場所で冬鳥の姿を目にしますが、よくよく考えれば季節限定で観察できる旬の鳥たちと捉えることができます。魚の回遊と類似する行動習性には違いないのですが、季節によって入れ替わり異なる種が姿を現す点で、絶好の観察材料だと思われます。もっとも魚に夏魚・冬魚という呼称はありませんけど……

では、季節から冬鳥限定のお話をしましょう。過去20年間に郷土の森博物館周辺の多摩川で観察された野鳥種は全部で132種類（府中野鳥クラブ記録）を数えます。このうち冬鳥は、夏鳥の倍以上に当たる43種で全体の32.6%を占めているのです。冬鳥の代表格は何と言ってもカモ類でしょう。最も多く見られるコガモを筆頭に、ヒドリガモ・オナガガモ・ハシビロガモ・オカヨシガモなど実に豊富な種類が観察されています。また、ハマシギやキアシシギなどシギ・チドリの仲間も「旅鳥」として多摩川に一時期羽を休めています。カルガモやカイツブリなどの「留鳥」を含めると、冬季の多摩川にはかなりの種が出現するので、冬鳥の宝庫とされているのです。郷土の森博物館でも定期的に園内の野鳥データを収集（府中市自然調査団・相馬尚教氏調査）していますが、ジョウビタキ・ツグミ・アカハラ・シロハラといった冬鳥が、敷地内の雑木林や小灌木の下で毎年確認されています。旅の宿として野鳥たちに認知されている何よりの証拠でしょう。陸鳥にとって森林性の高い所ほど生活に適しているわけですから。

### 旅路の果て

毎年出掛けていた先のごひいき旅館が、ある日突然店をたたんでしまったら……恒例の旅行も、行き先を変更するか止めてしまうかのどちらかになりますね。10年20年前に観察されていた多摩川の野鳥が近年姿を消したり、あるいは個体数が減っていたりするのはそんな理由からでしょうか。例えば河川敷がリクレーション施設として開放され、台風などで増水する度に川の流れは変わると、中州やヨシ原などの生活域も減少します。さらには護岸工事による人為的環境変化等も重なると、冬鳥たちの旅行先としては不適當となってしまう。ご当地旅館としての不備を棚に上げ、先方様は地球温暖化のありで越冬地や繁殖地への遠征を見合わせているなどと勝手に解釈し、無理矢理その場を納得させてしまう傾向もありますが、老舗旅館としての質は保ち続けたいものです。

それでも郷土の森博物館とその周辺には、毎年必ず冬鳥ご一行様が訪れ、一年中滞在のお客様や季節ごとの国内旅行者とともに、この季節を賑わしていらっしゃいます。どんなお客様が泊まっているのか、この機会にお教えしましょうか？

### テーマ展 37

### 「展示で見る冬の野鳥図鑑」

2006年3月26日（日）まで開催中！

## 星空は一期一会～星空観望会～

馬場弘修

当館にはドーム直径が 23m のプラネタリウムがありますが、そのドームに映し出されているのは、電球の明かりによって作り出された擬似的な星です。星に限らず、本物に触れ心を大きく揺さぶられたときの記憶は、なかなか忘れられないものです。星の美しさを体験していただく機会を一般の方々へ提供するために、昭和 62 年の開館以来、当館が所有している組立式の望遠鏡などを使って行う「星空観望会」を毎月開催しているのです。

平成 2 年度の 4 月からは口径 20 cm の屈折望遠鏡を積載したトラック「移動天文観測車ペガサス」が、観望の主力として加わりました。それまでは当館の敷地内だけで行っていた観望会でしたが、府中市内の小・中学校や地域の集まり、さらには姉妹都市の長野県八千穂村（現佐久穂町）などへ積極的に出かける活動へと拡大していきました。また、観望会を実施する際には、博物館の天文担当職員だけではたくさんの参加者に十分な対応ができません。そこで望遠鏡の操作や天体の説明ができる協力者が必要となり、星空観望会は府中天文同好会が、太陽観望会や館外の活動ではペガサス導入を契機に一般公募した天文指導員が中心となって事業を補助しています。

現在までに様々な天体を観望し続けてきた観望会ですが、一番印象に残っているのは 2003 年 8 月の「火星大接近」です。火星は 2 年 2 か月ごとに地球へと近づきますが、火星が楕円軌道で公転していることから地球との距離は接近時の位置関係によって大きな違いがあります。この時の接近では天文業界を始め、マスコミも頻繁に「6 万年ぶりの近さ」という報道を繰り返したため、一般の人々の関心も過去に例を見ないほど高まっていたのです。その高まりを思い知らされたのが、8 月 23 日（土）に開催した観望会でした。

当館では最接近の前日に実施したのですが、担当者の予測を遙かに上回る 900 人以上が来館し、最後の参加者がお帰りになった午後 11 時前までの間は完全なパニック状態でした。どの望遠鏡で観望するにも長蛇の列となってしまったため、様々な人間模様を垣間見ることもできました。「6 万年ぶりの大接近なのに、小さくしか見えないじゃないか！」と殺気立つ方、「月と同じくらいの大きさで見えるって聞いたんだけど」と不思議がる方、観望に夢中になり過ぎて連れてきた子供を人混みで見失い慌てているお父さん、さらには望遠鏡で火星を見ながら手を合わせ「ありがたや・・・」

と拝み始めるお祖母ちゃんなど、参加者それぞれの「火星を見たい！」という熱い思いが、まるで大きな渦となり郷土の森全体を包み込んだ一夜となりました。ペガサスが導入された直後のお披露目観望会でさえ、約 400 人の参加者だったことを思うと、まさに「火星フィーバー」（死語？）の一語に尽きる歴史的な夜だったのです。

それから 2 年 2 か月経った今年の秋、前回の大接近とほとんど変わらぬ大きさ（約 8 割の直径）で見える火星の観望会を 10 月に行う予定でしたが、悪天候により中止としました。今回の最接近ではマスコミの扱いが小さく、2003 年の時とは比較にならないほど情報量も少なくなってしまう、一般の方々の火星への関心も高まらないままで迎えた、翌 11 月の観望会……。北風が吹く寒い夜にも関わらず約 50 名の参加者が集まり、雲が多いながらも最接近時と変わらぬ大きさで見える火星などを観望しました。2 年前の「嵐のように過ぎ去った観望会」の時と、同じ天体「火星」を見ているとは思えないほど落ち着いた雰囲気でした。今回はそれぞれの参加者に十分な対応ができ、これが本来の星空観望会の姿なのだと、改めてあの夏の夜を思い出しました。

博物館における事業の成果は具体的な形として残るものが少ないため、担当者としては「相手の心に何を残せたのか」という自問自答の日々です。また、担当者として一般の方々に伝えていきたいのは、「星空は一期一会」だということです。夜空の星々は不変のように思われがちですが、星座を形作る恒星を背景にして、月や惑星は日々位置を変えるために、今日と同じ星空は過去にも未来にも存在しません。その時、その星空を見上げているのが世界中で、もし、あなただけだったとしたら……。何気ない一瞬の星空が何よりも貴重なものであると感じてもらえるように、この先も星空の案内を続けていく担当者なのです。



移動天文観測車ペガサス  
府中天文同好会 吉村昌晃氏撮影

最近の発掘調査

# 50年ぶりに発掘された 三千人塚

矢崎町二丁目 府中市遺跡調査会 紺野 英二



発掘中の三千人塚

今回に紹介するのは、矢崎町<sup>や さきちょう</sup>2丁目にある“三千人塚”<sup>さんぜんにんづか</sup>です。府中市民の皆さんには、『武蔵府中郷土かるた』の“え”＝えのきが<sup>えのき</sup>高い三千人塚、でご存知の方も多いと思いますが、三千人塚は背の高い<sup>えのき</sup>榎の木がそびえ立つ塚です。この塚は、江戸時代の地誌にも紹介され、昔からその存在が知られていました。塚の上には、多摩地区最古の<sup>きねんめい</sup>紀年銘（康元元年＝1256年）の<sup>いたひ</sup>板碑が立っていて、“板碑の立つ塚”としても有名です。

この塚が最初に発掘されたのは、今から50年前の1955年のこと。地元の郷土史家らが中心となって、塚の西側を<sup>か そうこつ</sup>重点的に発掘し、火葬骨を納めた鎌倉時代から南北朝時代の<sup>こつぽ</sup>骨壺4個を発見しています。

50年ぶりとなった今回の発掘は、最近、東京都指定の旧跡から史跡に変更されたことに伴い、塚の保存と整備を目的として行いました。残念ながら今回の調査では骨壺や<sup>はか</sup>墓は見つかりませんでしたが、新たな発見もありました。それは、塚の東側から“礫石経”<sup>れきせききょう</sup>という、お経の文字を書いた石を発見したことです。

礫石経は、自身の健康や繁栄を願って小石に<sup>すみ</sup>墨でお経の文字を書き写したものです。三千人塚では、3万個以上の礫が詰まった層から、約150点が出土しています。書き写された文字を見ると、非常に上手な字もあれば、ただ字を真似て書いたようなものもありますので、たくさんの方がお経を書き写していることがうかがえます。一緒に出土した<sup>とうじ</sup>陶磁器の破片からすると、これら礫石経の年代は、江戸時代終わり頃と考えられます。

かつて三千人塚は、<sup>ふばいがわら</sup>分倍河原の合戦（元弘三年＝1333年）と結びつけられて、三千人の<sup>なきから</sup>亡骸を埋葬した塚との<sup>でんしき</sup>伝承がありましたが、今回の発掘調査でも、こうした伝承とは関係のないことが立証されました。どうやら三千人塚は、鎌倉時代から室町時代の地元の有力者一族による小さな石積みのお墓が点在していた所に、江戸時代終り頃になって礫石経を用いた石を積んで、新たに塚を造ったもののようです。

中世の小さな塚の点在する場所が、江戸時代には地域の<sup>しんこう</sup>信仰の対象となり、地元の文化財として今日まで大切にされてきたことがわかります。



礫石経が出土した様子

写真は「佛」の文字が書かれたもの。このほか、「作」「蔵」「薬」等の文字が書かれていた。礫の大きさは3～10 cm。

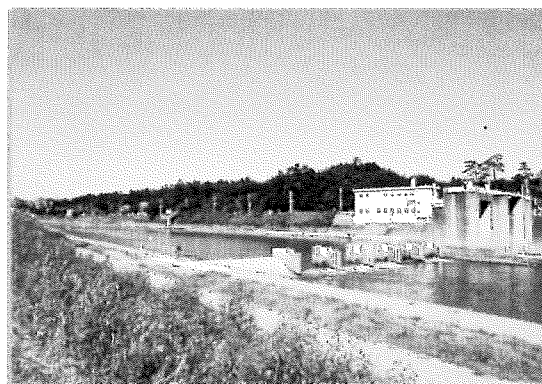
# たも RIVER WARS

## ⑪ 暴かれたシナリオ

中村武史

一瞬の沈黙をタウ工が破った。「おいハニー、どう言うことなんだ？」多摩川源流神の暗黒面なる者の反乱を阻止するべく、中学生4人が体験した非日常的な冒険もついにその全貌が明らかになる時がきたのだ。金田一耕介ばりの名探偵役は、やはりハニーを置いて他には存在しない。

「思い出さない？この3日間で何度も顔を合わせている人よ、このおじさん。その都度場所も立場も違う形で遭遇しているから気が付かなかったけど…」強張った表情を浮かべたエノキンの口が開く。「ど、どうしてそう思うの？」「昨日浅川の合流点で解散した後、帰り道の土手から釣り人を見ていて気が付いたのよ。最初の日…ほら、溪流で釣り人がサル軍団に襲われたって言って…」「おおそうだ、あのおじさん！」タウ工も思い出したと見え、目の前に立つ男の帽子に隠れた顔を覗き込んだ。ハニーは続ける。「次は激流を下っていた時、接触しそうなったカヌーの人…あれもおじさんだよな？それから羽村堰で色々説明してくれた自称多摩川研究会の人もそう…あのね、考えれば考えるほどこの人の七変化こそ、私たちにサル軍団の存在を信じ込ませた手品の種なんだわ」「それは一体どう言う…最初から大ザルなんていなかったってことなのかな？」タウ工は混乱していた。「遡るとね…一番初めに遭遇した多摩川源



調布堰と河岸段丘の林（多摩川台公園）  
『新多摩川誌 / 別巻』（新多摩川誌編集委員会編）

流神こそこの人なのよ。そう考えると全てのつじつまが合うの…でしょ？エノキン」突然矛先を向けられたエノキンは少々震えた声で、「えっ？何で俺に聞くんだよ…それにサルが存在しないって言うけど、実際にみんな見ただろ？白丸ダムでも羽村でも、今日だって郷土の森で…」「そうよ、確かに全員が大きなボスサルを見た…でもエノキン、それはあなたとおじさんの大芝居！」単純なタウ工は頭を抱え込みながら呻くように、「サルは確かにいたんだけど…いなくて…エノキンとおじさんの協力で…手品の種が…源流神？」「タウ工、まあいいから聞いて…順番に話すわね」ハニーが絡まった糸を解し始める。「私たちはこの3日間、幻想の世界に落ち込んだかのような体験をした…けど現実問題として、普通に考えればあり得ることではないわよね…。となると魔法の仕掛けがどこかに隠れているわけよ…で、往々にしてそれは身近にあるものなのよね？」ハニーが再度エノキンを見つつ問いかけると、一同も俯って彼の表情を伺った。

謎解きが始まったこの場所…正式名称は調布取水所防潮堰。海まで13kmの位置にあり、川岸まで山が迫り水

際は切り立った崖といった景観である。丁度国分寺崖線の南端に位置する等々力溪谷からの延長だ。深い緑は亀甲山古墳を始めとする古墳群のある多摩川台公園であった。多摩川の汚染が騒がれた昭和45年まではこの堰から水道水が取られていたが、現在は工業用水のみ取水されている。名前にある通り海水の逆流を防ぐ役割も担っているわけだ。近年、アコの遡上調査の舞台にもなっている注目箇所でもある。目先には丸子橋を行き交う車の波、そのすぐ先の鉄橋を東海道新幹線が通過して行った。夏の太陽は相変わらず強烈な日射を4人に浴びせている…

「源流の旅はそもそもエノキンの提案だったよね。みんなの家族まで説得してさ。小学校時代から有名な多摩川博士のガイドならばって、信頼して行ったけど…そこが盲点だったのよ。あの日、山頂で食べたお昼にエノキンの勧めるコーヒーを飲んだじゃない？微量の睡眠剤っぽいものが入っていたと思うのよ。たぶんこのおじさんがエノキンに渡してあったのね。軽く意識が薄らいだ感覚を思い出さない？木立から漏れる光に目が眩んで半催眠状態を作り出したのね。あの源流神はそんなタイミングに現れた…でもあの神様はこのおじさん…あの時は本当に仙人みたいに思えたわ。サルが反乱を起こして森の木を切り倒して行ったって…つつつ、おじさんがイカダ作るのに使った木なんでしょ？…その後サルに襲われたと言う釣り人に会い…って、これおじさんの狂言だけど…すぐにエノキンが消えてしまったわね、あたかもサルを追って行っ

たかのように…これにも意味があったのよ。丹波溪谷での投石はあなたね、エノキン！私たちに当たらないように石を投げたのは、あの先にある淵の危険を回避させるためとサル軍団の存在を確実に信じ込ませるためだった…そしてついに白丸ダムで大ザル目撃…今度はおじさんでしょ？ね」

目前の男とエノキンが、用意周到な連携と巧みな動きで他の3人を誘導しつつ、ここぞと言う時に現われる…こう考えれば全てが線で繋がるのだ。御岳溪谷で遭遇したカヌーの男の場合もそうだ。あたかも上流で見てきたかのように黒い警告の作り話を伝え、4人より先に下ると用意した黒インクを川面に落とす。後にそこを通過する4人にとっては、サルの愚業についての信憑性が増すと言う簡単なトリックであった。極めつけは白丸ダムと羽村で遭遇した大ザルだが、何と着ぐるみを着用した男の姿だとハニーは言う。詳細を語りだす名探偵を遮ったのは意外にもタウ工の一言だった。「あ、あの…おじさんが大ザルなら…今日郷土の森で見たサルはどうして2匹？」

つつく

※あるむぜお イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意